

学長プロジェクト3

地域との交流拠点 - 千葉商科大学プロジェクトと「The University DINING」の意義



政策研究大学院大学教授

福井 秀夫
FUKUI Hideo

プロフィール

政策研究大学院大学教授、まちづくりプログラムディレクター
1981年東京大学法学部卒業。京都大学博士（工学）。建設省、東京工業大学を経て1996年法政大学社会学部教授。2000～2001年ミネソタ大学政治学科客員研究員。2001年政策研究大学院大学教授。専門は行政法、法と経済学。著書に、「司法政策の法と経済学」（日本評論社、2006）、「脱格差社会と雇用法制」（共編著、日本評論社、2006）、「ケースからはじめよう法と経済学—法の隠れた機能を知る」（日本評論社、2007年）、「マンション建替え—老朽化にどう備えるか」（共編著、日本評論社、2012年）ほか。

1 大学食堂の概念を覆す「The University DINING」

千葉商科大学は、2017年春、ユニークな大学食堂の試みである「The University DINING」プロジェクトについて、(公社)日本不動産学会業績賞を受賞した。本稿では、同学会業績賞委員として関わり、さらに同学会2017年秋季全国大会で開催されたワークショップ「大学の地域貢献と不動産開発のハード、ソフト、ハート」に参加した経緯を踏まえ、感想を述べたい。

通常、大学の食堂は、気軽に入ることができて安い、おしゃれでなく、質よりも量を重視、学生の胃袋を満たすことが主眼で、教職員や外部の者の利用はあまりない、というイメージが一般的のように思われる。私などは、価格なりにおいしい食事が好きであったため、学生時代、大学の近くに住んでいたこともあり、行きつけでお気に入りの下宿そばの食堂にランチに戻ることもしばしばあった。大学教員になってからも、以前の勤務校の東京工業大、法政大では、学内食堂に

はほとんど足を踏み入れた記憶がない（今の勤務先には食堂がない）。

これに対して、残念ながら食事を取る機会はなかったものの、お伺いした千葉商科大の「The University DINING」は、従来の大学食堂の概念を大きく覆すものであった。開放的でしゃれた建築・インテリア空間、健康志向のメニュー、外部の方が散見されるダイニングテーブル、学生が食事にとどまらずくつろぎ議論する姿など、快適で様々な主体の交流の場となっていることが見て取れ、学会賞受賞の意義を改めて感じた次第である。

不動産学会は、不動産全般に関する学際的な学術研究組織であるが、実務や政策との接点を重視していること、建築、法律、といった単一の学術分野からの伝統的な方法による取り組みのみならず、自然科学、社会科学の諸分野が、同じ対象について、それぞれの方法論から分析するとともに、相互の分析について批判、融合を行うことを目指していることを特徴としている。このような学会の趣旨から見て、「The University DINING」には、次のような特徴があると思われる。

2 ユニークな運営と地域交流が生む好循環

まず、大学が主導して、その責任の下に、建築設計、事業コンセプトの定立、埋蔵文化財の調査・発掘、食堂運営に対する大学・学生等の関与などに主体的に取り組んでいることが注目される。特に、設計段階から周到な準備を行っていること、ニーズに敏感な学生も運営に関わっていることは、他にあまり見られない特

徴と思われる。

さらに、食堂を積極的に地域に開放し、それを上手に広報していること、実際に学生、教職員以外にも、多くの地域住民や、近隣施設の職員等が、快適な食堂空間として好感を持って多数利用していることも、大きな特徴と思われる。災害時の避難地として千葉商科大学が位置付けられているが、食堂利用経験者が増えれば、避難も容易になり、防災拠点としての実が挙げると考えられる。

このような取り組みは、大学全体の好感度をも上昇させ、志願者の増大にもつながるなど、「食堂」という一施設のコンセプトと実際の運営が、社会に一定のプラスの効果を与えるとともに、それが知の拠点としての大学の付加価値をさらに高め、多くの若者を学生として引きつけるという好循環が生まれつつあることは、大学における効果的なブランド戦略としても、意義深い。

3 千葉商科大学プロジェクトの社会的貢献

学会の秋季大会ワークショップでは、千葉商科大学から、原科幸彦学長、小栗幸夫・朽木量・西尾淳・吉竹弘行の各教授が参画し、「The University DINING」以外にも、千葉商科大学の独自の意義深い取り組みの数々を紹介するとともに、数々の有益な提言をいただいた。例えば、地域の研究プロジェクトを奨励するための助成制度、環境に配慮した電気自動車の走行実験、地元のプランニングへの協力と貢献など、元々は研究と教育を看板とする大学が、その知的な集積を生かして、地元自治体や地域住民と有機的な連携を図る試みが成果を収めつつある姿は、少子高齢化の中で、多様な意義の発揮が求められつつある高等教育機関の今後のあり方の重要なモデルとなりうる。大学を挙げての、学問と教育、さらに地域貢献の融合の貴重な取り組みとお見受けし、大いに感銘を受けたところである。

私自身は、勤務先大学でまちづくりプログラムディレクターを務め、毎年、全国の基礎自治体、都道府県、国、UR などから、一年間の修士課程プログラムに優秀な現役職員の方を受け入れている。ともすれば、自治体では、条例や行政指導によって、多くの独自の規

制や課金制度を作りがちであるが、政府部門の介入には、すべて科学的根拠が必要であり、介入が強すぎても弱すぎても、適切なまちづくりを達成できない。法と経済学の標準的知見を教授しつつ、憲法の人権保護の厳格な枠組みの下で、いかにして自治体や公的セクターが、市場の失敗を適切に補正して、環境と安全を確保し、人々の福利厚生を増大させることに貢献できるか、という問題意識を持って教育に携わっていると

ころである。

安心、安全、快適なまちづくりという観点からは、特に、取引を通じないで第三者に与える利益や不利益を、自治体などが適切にコントロールする、外部性の統制、あるいは社会に有益だが、同時消費ができて他者を排除できないためフリーライドが容易な、公共財の提供がきわめて大切になる。騒音、大気水質汚染、二酸化炭素排出の制御など、環境の最適化、水害・地震・火災などから人々の生命、身体、財産を守る防災政策も、やはり土地利用やインフラに関する外部性の統制が大きな役割を果たす。

この意味で、千葉商科大学の安心安全プロジェクトの推進は、自治体の、特に外部性の統制者としての適切な役割に関する情報発信・助言、大学自身による地域交流拠点と避難地の提供という外部性の発揮、公共財の拠点を果たしていることの標榜でもあり、法と経済学の標準セオリーの実践という点でもきわめて意義深い。

4 故熊田教授と原科学長の思い出

思い返すと、既に社会工学、環境学の第一人者として名高かった原科先生に個別にお目にかかり薫陶をいただいたのは、1993年、旧建設省からの出向で東京工業大学社会工学科の熊田禎宣教授の下で助教授を務めたときであった。日本不動産学会などにも、同年、原科先生の命により入会した。熊田先生は、その後、千葉商科大学教授もお務めになり、原科先生と共通の恩師として一方ならずお世話になったのであるが、同大学在職中に残念ながらご逝去された。熊田先生は、碩学で、社会工学の実践を地で歩まれるような方であった。とにかく、通俗常識はまず疑え、学問は自由、大いに異論、批判を行うべし（師匠も疑え）、誰かの

踏襲でなく、新しいこと・有益なことを付け加えよ、というポリシーを、研究でも、教育でも実践しておられた。熊田先生の社会工学原論、ないし科学的方法論をさらに洗練させ、社会的意思決定の理論、環境理論として論陣を張り、熊田先生とペアでさまざまな学術の場でリーダーシップを取っておられたのが原科先生であった。

両先生からは、折に触れ、学会の会議、シンポジウム、社会的プロジェクトなどにお誘いをいただくとともに、一緒に食事をしながら大いに議論をするなど、文字通り学問の事始を個人教授いただいた。自由な立場での学術的言論の意義を叩き込んでいただいた経験が、その後、官僚を辞して研究者に転じる大きな契機となった。

ちなみに、官僚時代もそれ以降も、多くの錚々たる顔ぶれの審議会委員などの研究者とお付き合いがあったが、省庁や分野を問わず、官僚機構に機嫌を取り結び、委員などになりたがり、何も頼まないのに役所のつまらぬ制度の正当化をしたがる矮小な研究者も数多い。ところが、両先生には、そのような事大主義がまったくなく、物事はすべて科学的懐疑精神の下で是々非々で決する、権威や強者に屈服しない、弱者には尊大にならずむしろ優しい、という知的態度が一貫している。

5 古習の惑溺を排した大学像の実現を期待

日本の開国、敗戦時の文明論の中興の祖でもある福澤諭吉、丸山真男の、古習の惑溺を排せ、多事争論を好め、物の尊きに非ず、その働きの尊きなり、「である」論理より「する」論理を、実感信仰・理論信仰から決別を、といった優れた知的伝統の系譜に、両先生は、分野は違えど自然に連なっておられるのが誠に印象的であった。

原科先生とは、かつてシンガポールやノルウェーの道路課金制度、環境・混雑対策の調査などにご一緒し、日本と異なる制度について勉強させていただいた。ミシュラン三ツ星レストラン、マーラーのシンフォニー演奏会、フィヨルド踏破なども一緒に堪能した。私のミネソタ州滞在中にも、自宅を訪問いただき、豊か

な自然環境の踏破、近代の文明による機械などを拒否するアーミッシュの集落調査などをご一緒したのも懐かしい思い出である。

原科先生の意思決定理論や組織論は、お目にかかった頃から、完成度の高さはもちろんだが、その後まったくぶれていない、とお見受けしている。学問の筋を貫く姿勢で、実際には理論どおりに動くわけではない大きな組織のマネジメントを行うことにはご苦労も多いかと察するが、むしろ原科先生は、その健全な潔癖さと誠実さゆえに、古習の惑溺を排して、加藤寛先生、島田晴雄先生という、やはり傑物学長の伝統を発展させ、千葉商科大学を格別に盛り立てていかれるものと確信している。

すばらしい学長の下で、千葉商科大学、そのユニークな諸プロジェクト、ご活躍の教職員の皆様が、ますますの発展を遂げられるよう、心から念じている。